青年自立支援へのアグリセラピーの応用

－S 社会福祉法人の事例研究－

カウナン春奈・中川光弘

（東京農工大学・NGO-AGRI）

我が国における、ひきこもり、ニート、それに伴う生活困窮者など、自立支援が必要な人口は増加を続けており、相談支援センターやNPO法人等の開設も増えている。平成21年度には、厚生労働省の「ひきこもり対策推進事業」も開始し、そこでは、「誰もが安心して過ごせる場所、自分の役割を感じられる機会があることが、生きていくための基盤になる」としている。また農業分野においても、農福連携という、農業や自然、グリーンケア（農業福祉力）を活用して、自立支援や福祉向上を目指す試みが始まっている。アグリセラピー（農業療法）は、農業実践を中心としたホリスティックな療法であり、食養生、運動療法、心理療法、農業実践、ラポール（信頼）をベースとした小集団での社交体験から構成されている。農業には心身を癒やす効果が有ることは、これまでの多くの実践から確認されているが、その効果を客観的に実証した研究は少ない。

本研究では、アグリセラピーを応用しているS社会福祉法人で約半年間生活し、社会復帰を遂げたAさんを事例に、彼女の入塾から卒塾まで、さらに社会復帰までの心理状況の変化について心理検査を使った評価を試みた。今後の農福連携における青年自立支援の課題について考察した。